

「隠れため池」について考える 稲垣 浩之（三重県 赤十字血液センター）

1. はじめに

「浮いて待て」という言葉は、現在ではPCに「ういて」と入力すれば、すぐに「ういてまで」と表示され、ヒットする。しかし、20年程前はそうではなかった。「ういてまで」という言葉が世に認知されるようになり、20年前との雲泥の差に対して、良い時代になったものだと感慨深く思う。しかし、「隠れため池」という言葉は、現在それほど認知されていないのが実状だと思う。

2. 河川 に出現する「隠れため池」

三重県といえば、伊勢神宮と忍者である。そのためなのか、本当に隠れて見えない「ため池」も存在する。隠れため池は、道路より高い所にある為、普通を歩いているだけでは、なかなか池の存在に気付かない。

さて、三重県津市を流れる二級河川に志登茂川がある。この川は、1974年7月に発生した集中豪雨による堤防決壊により、下流地域に浸水被害をもたらした過去がある。この堤防決壊により、筆者の実家も床上浸水の被害にあった。その後、可動式の堰がいくつか作られ、防潮目的の堰も存在するが、「今井橋」横の堰（今井水位観測所の横）は、3月中旬頃の農繁期直前から8月の新盆の頃まで締め切られる結果、堰より上流は水に満ち、まさに池が出現する。

3. 水難事故

2020年6月、近くの団地に住む小学生が志登茂川に落水し亡くなる事故があった。新聞報道では、本事故の原因は、虫取り中に誤って堤防から落水したことによるとされている。落水現場は、今井橋から上流へ約1キロに位置し、「隠れため池」の真ん中辺りであるが、ここは小学生の登校ルートから見える場所であり、いわば全く土地勘の無い、知らない場所での水難事故ではないと考えられる。もし、堤防沿い全てにフェンスが張り巡らせていたら？ もし、落ちた際に堤防によじ登る梯子がもっと沢山設置されていたら？ もし、落水した時、堰が上がっていて、水が無い時だったら？ このように、「もし？」は数多くある。

しかしながら、堤防の角度は約30度あり、2024年8月の事故調査委員会の調査によると、訓練された救助者でも堤防をよじ登るのは困難であったと報告されている。もし堤防が濡れていたら？ 落ちたことでパニックに陥っていたら？ 要救助者の救助はさらに厳しい条件を呈したと考えられた。つまり、「隠れため池」では、河川へ落ちた時点で、命を失う危険性が格段に高いと考えられる。

現在、川沿いの注意喚起の立て看板は「あぶない、きけん」「よいこは、ここで遊ばない」「ひとりで、あそびない」という類のソフトな表現だが、それを「落ちたら、死ぬかも？」「落ちたら、命の危険あり」等のもっと厳しい言葉に変えるべきではないかと、筆者は考える。

4. 今後の対策

毎年、亡くなられた子どもさんの命日には献花が見られる。時間は妙薬、時が解決とは言え、残された者の悲しみは、簡単に癒えるものではない。筆者自身にも9歳の息子がいるが、ご遺族の悲しみは推して知るべきである。筆者は、「隠れため池」を否定するのではなく、隠れため池が出現する時季にはその河川エリアは「隠れため池」になる川でありということや、落水の場合は、命を失うことに繋がる危険性があることを、子どもを含めた近隣住民に周知徹底することが大切であると考えます。

5. 終わりに

筆者は、日赤水上安全法指導員になれるような類稀な泳力は有していない。しかし、泳力に秀でることだけが水難予防や水上安全ではないと信じ、常に活動している。何よりも、再びこのような悲しい事水難事故が発生しないように、「この河川は隠れため池になり、落水したら命を失う危険がある。」と、繰り返し情報発信を行い啓発していくことが、必要であると感じている。

ところで、河川も様々な特徴を有し、河口部では潮の干満の影響もある。また、河口堰も存在し、稼働式堰堤で「隠れため池」が出現することもある。水難学会が提唱した「ういてまで」のように、「隠れため池」という言葉が市民に知られるようになれば、多くの市民の河川の危険性の意識も変わるのではないかと考える。